
Parasitic on Love.

Koto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P a r a s i t i c o n L o v e .

【Nコード】

N 8 8 9 1 Z

【作者名】

K o t o

【あらすじ】

あたしが恋をした相手は、あたしの兄を好きな“おかまさん”でした。

あれ？これって普通の恋より百倍大変じゃない？

そんなあたしの前途多難な恋する365日。

前途多難の幕開け

——まるで、人形のようにだと思った。

色素の薄い栗色の髪は襟足に届く程度まで伸ばされ、後ろで一つに結ばれている。それと同じ栗色の切れ長の瞳に、その瞳をより一層際立たせる涙ぼくろは壮絶なまでの色気を醸し出し、見るものを魅了しているのだと思う（きつとこの瞳に見つめられたら圧倒され、引き込まれ、動けなくなってしまうはず）。細く長い手足に引き締まって無駄のない体はモデル顔負けと言っても過言ではない。

ただ一つ無理矢理にも難点にするならば生まれ持ってきたその中性的な顔立ちだろうか。

男にしては美しすぎる顔立ちだが、女にするならば少々いかつい。なんともアンバランスなようで意外とバランスのとれた顔は最早人形に例えてもおかしくはないと思う。

そんな人形……基、三島綾稀は本当に人形のように体を床に投げ出し、だらりと横たわったままピクリとも動かなかった。そしてそんな彼に物申したい。

「綾ちゃん。ここ、あたしの部屋だよ……?」

眉を下げ綾ちゃんの側にちょこんと座れば、綾ちゃんはようやくピクリと反応し、切れ長の瞳をこちらに向けた。

思わずどきりと高鳴る心臓を慌てて押しとどめ、困ったように見つめれば、綾ちゃんは瞳をうるつとさせながら勢いよくあたしに抱き着いた。

「わあっ!?!」

ぎゅううつと今にも効果音が聞こえてきそうなほどにあたしを抱きしめ、ぐすんと鼻を鳴らす様は先ほどの人形と打って変わってただの人間みたい（いや、もともと人間だから!）。というか、いい男も形無しのような気がする……。

あたしはふう、とため息をつき、そんな彼の頭をそつと撫でてあげた。

「こんどはどうしたの……?」

極力柔らかな声で綾ちゃんに問えば、綾ちゃんはよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりにあたしの肩をつかんでまくしたてるように話し始めた。

「ましろ! 聞いてよっ。孝仁ったら、孝仁ったらあああああ!!」

と叫ぶ彼は形無しどころではない。

最早“彼”ですらないと思う。

だって綾ちゃんの好きな人は……。

ガチャッ

「ん？なんか呼んだか？？」

ひょっこりと急に顔をのぞかせた男に、これまた一瞬で顔を変え、男前に戻った綾ちゃんはにっこりと笑って否定した。
最早神業だと思う、うん。

「いいや、なにも？な、ましろ？」

「え？う、うん」

気のせいか、なんて言いながら頭をかくのはあたし、山城真白の兄、孝仁。

もうお分かりかな？そう、綾ちゃんの思い人はあたしの兄、孝仁お兄ちゃんなの。

つまり綾ちゃんはおかまさん、てこと。

「つかなんでましろの部屋に綾稀がいんだよ」

「悪い悪い、ましろが可愛くてかまってたんだよ」

すくっと立ち上がりながら頭をなでる綾ちゃんに、またしても胸がどきりと音を立てた。

「じゃあな」

そう言ってお兄ちゃんと一緒に部屋を後にした綾ちゃん。

あたしは不覚にも熱くなった頬の熱をごまかすようにそっと頬に手を当てた。

いい加減なれなくちゃという気持ちと、嬉しいと思う気持ちに何やら複雑な気持ちが混ざり合ってもうなんだかよくわからない気持ち

になった。ごちゃごちゃしてて気持ちが悪いというか、なんか悲しいというか…いや、虚しい……？
だって喜びよりも切なさのほうが勝ってしまうから。

「はぁあ……。」「

もうこれもわかると思う。

あたしは、綾ちゃんが好きなのだ……。

不毛なことは百も承知。

だって綾ちゃんは男が好きで、よりによってあたしの兄が好きなんだから。

あれ？

これって普通の恋より百倍も厳しいじゃないか。

私を中心

そういえば昨日、綾ちゃんが言いかけたことってなんなんだろう？

あたしは授業中（しかも大嫌いな数学）にもかかわらず、ぼんやり窓の外から見える景色を眺めながらそんなことを考えていた（窓際一番後ろの席の特権だね）。まあ、あんなにがっかり落ち込んでたんだからよっぽどのがあったんだろうなあ。じゃなきゃ鼻水すすったり涙目になったりしないよね。

後でメールしてみようかな、なんて思った矢先にポケットに入れていた携帯が震えた。

あ。綾ちゃんだ。

ちよっぴり運命的だな、なんて乙女チックなことを考えたあたしが恥ずかしい。

そんなこと考えたって無駄なのをあたしはずーっと前から学んでる。少なくとも綾ちゃんがお兄ちゃんを好きだと知って3日目以内には、ね。

妙な期待なんて捨てて、あたしはメールボックスを開き、綾ちゃんからのメールを見る。

ほら、やっぱり。

——ましろッ。

孝仁が冷たいいいっ！！！

綾ちゃんの頭の中はお兄ちゃんदैいっぱいなんだから。きっと、いや絶対綾ちゃんはお兄ちゃん以外考えていない気がする。いつだか綾ちゃんにお兄ちゃんの何がいいのか聞いたら真っ赤な顔して「全部。」って言ってたし。

妙な期待は当の昔に捨てたとしても、この胸のちくちくとさす感じは一向に収まってはくれない。むしろ日経つごとに、あたしが綾ちゃんを思えば思うほど増している気がする。きっとこの痛みは好きと比例してるんだ。

何が冷たいの??と聞きたくもないけど一応送ってみると、綾ちゃんからはほんとに一瞬で返事が返ってきた。あたしが何気ないメールを送ったときは返事が遅いのに、お兄ちゃんに絡めたメールの返信はピカイチで早いと思う。
やるせないよね、ほんと。

——ましろにあげるからって、孝仁がつくったマフィンもらえなかった(;;;))

くだらな!

あたしはそんなことかとかとがっくり肩を下ろした。てゆうかお兄ちゃんもマフィンくらいあたしじゃなくて綾ちゃんにあげればいいのに……。ため息一つついて返信しようとすると、また携帯が震えた。

(あ、お兄ちゃん……)

噂をすれば何とやらかな。

そしておにいちゃんからはましろの好きなマフィン作ったぞ^^とかいうメールが送られてきてこれまたため息が出た。これはお兄ちゃんに綾ちゃんもマフィン好きだからあげれば?とメールを打つべ

きなのかな……。ああでもあたし、確かにお兄ちゃんの作るマフィン好きだし、これたぶんバナナとチョコ入ってるからすんごく美味しいと思うし……。

むー。

すっごく迷う。

そして結果、今日は学校で友達からマフィンたくさんもらったからもう食べれないって嘘ついた。だから綾ちゃんにあげて？って。……うん、これ結構酷なもんだよね。さらばあたしの好きなマフィン。涙がちよぎれるよ、ほんと。

ブーブー……

あ。綾ちゃんからだ。

——孝仁からマフィンもらった！！

ありがとましろ。大好き！！

きゅん。

マフィン、諦めてよかったかも……。

結局あたしは綾ちゃんに甘くて、綾ちゃん中心で考えちゃうんだよね。これって駄目だと思うけど、綾ちゃんが喜ぶならいいかなって思っちゃうから。それに、大好きって言ってもらえたし。

あたしも綾ちゃん大好き、そこまで打って送信ボタンを押そうかどうか迷った。

これくらい、大丈夫だよね。

そう思いつつ、消した。

結局、どういたしましてって簡素なメール文章を送ってしまったあたしはとってもかわいくないし、少しも素直じゃない。でも少しでも好きって伝えてしまえばいつかどこかでボロを出して、きっと綾ちゃんに迷惑かけちゃうから。

そう考えるあたしはやっぱり綾ちゃんを中心。

到底勝てそうにない

時々、本当にこの家があたしの家なのかと一瞬疑問に思う時がある。例えば、そう例えば今日見たいに我が家の住民以外の人がソファでくつろぎながらお母さんと楽しそうに会話して、帰ってきたあたしに気付いたお母さんと一緒におかえり、なんて言っちゃったりして。しかもおまけに自分の隣に座る様に催促したりなんかして（2人がけのソファを横に座るようにポンポン叩いてた）。

ここ、あたしの家ですよね？

我が家にすっかり馴染んで溶け込んでる綾ちゃんに苦笑しつつ、あたしはカバンを椅子に置き、催促する綾ちゃんの隣に腰をおろした。

「おかえり、ましろ」

「あ、うん。ただいま」

お母さんがにこにこ微笑みながら、相変わらず仲良しね、なんてほのぼのの呟く。それに同調して綾ちゃんも仲良しだねー、とか言ってたしにピタッとくつついた。うん、やめてほしい。

「おい、ましろ。なんか飲むか？」

お兄ちゃんが冷蔵庫の中をあさりながら聞く。お行儀の悪い兄だな、なんて思いつつ、オレンジジュース！と返せば、了解と返ってきた。もはや家に帰ってきてオレンジジュースを飲むことは習慣化してるから飲まないと落ち着かない気もするほどあたしはオレンジジュースを崇拜している（ちよっと大げさ？）。

「あ。母さん、オレンジジュースねえよ」

「あらやだ。買い忘れちゃった。ごめんね、ましろ」
「や、別にいいよ」

困ったように眉を下げるお母さんに苦笑する。いくら崇拝するほど好きでも我慢くらいできますよ。いつまでたっても子供扱いなんだよなあ、なんて遠い目をしていると、綾ちゃんがねえ、とあたしの肩を叩いた。

「なあに？」

「じゃあ俺と買いにいこっか」

「・・・へ？」

急な申し出にポカンと口を開けていると、お母さんが嬉しそうに、お願いできる??と綾ちゃんにお伺いをたてていた。

「良いですよ。ほら、ましろ。行くぞ」

「あ、う、うん」

「孝仁はなんかいる？」

「・・・いや、いい」

綾ちゃんがあたしの手を掴んで立ち上がった。あたしは引きずられるように綾ちゃんに連れて行かれた。

繋がれた手が思いのほか大きいとか、あったかいとか、そんなことばかり頭の中をぐるぐるまわって一瞬言葉を詰まらせてしまう。

そんなあたしに知ってか知らずか、綾ちゃんはニヤニヤ笑って初々しいね、ってそう言って大きな手を離してしまった。ほっとしたような残念なようや気持ちいが胸に残った。

「別に、初々しくなんかっ」

「はいはい。別に手繋いだって戸惑ったりしないもんねえ」

「っ！」

くすくす笑う綾ちゃんにあたしはそっぽ向けば、綾ちゃんはごめんって、と謝ってあたしの頭を撫でた。

あたしがこういうことされるの慣れてなくて、すぐに赤面したりするのを知ってるから綾ちゃんは時折こうやってからかってくる。あたしとしてはドキドキしたりして赤面しても、ただ照れて、慣れなくてそうなると思われるから都合がいいけど。

でも複雑だなあ。

だって本当は綾ちゃんが好きで、ドキドキして、こうやって赤面してるんだから。

「寒い・・・」

そう言って赤くなったほっぺを手で包めば、綾ちゃんはそうねって言って前を向いた。

綾ちゃんはいつもお兄ちゃんの前とかじゃあちよつと優しいお兄さんの口調なのに、あたしと2人の時はちよつとお姉っぽい口調になる。

なんだか2人だけの秘密っぽくてあたしは好き。

「綾ちゃん、お兄ちゃんと何かあったの？」

「え、なんで？」

「え？だって何かあったからコンビニ誘ったんでしょ？」

キョトンとした顔で綾ちゃんを眺めると、綾ちゃんは笑って首をふった。

「今日はましろにいつものお礼、しようと思っただけ」

「お礼？」

「いつも何かあったら慰めてくれるでしょ？」

ありがとね、って綾ちゃんがキレイに笑った。思わずあたしの胸が不意を突かれた様にどきりと音を立てた。

ズルい。

本当にズルいよっ。

そうやってあたしの心を魅力して離さないんだから……………。

あたしは慌ててうつむき、こくりと頷いた。だって今、きっと、今までにないくらい顔が赤いから。

「ハーゲンダッツ……」

「ん？」

「バニラが食べたい」

ぷつと、噴き出す声が聞こえた。綾ちゃんはちよつと笑って何個でも買ってあげるって。

精一杯誤魔化そうとしたらアイスおねだりってどんだけお子様なのよ。自分の言動にに肩をがっくりおとした。

「オレンジジュースは100%ね」

「はいはい、わかってるって。ましろってばいつもあそこのコンビニのあのオレンジジュースしか飲まないもんね」

その言葉に目を丸めた。

なんで綾ちゃん、知ってるの？

「あー。なんで知ってるのって顔ね」

こくこくと頷けば、綾ちゃんはいたずらに笑って顔をぐっと近づけた。

「いつも見てるから」

なーんてね。

そう言って歩先をく綾ちゃんに、あたしは到底勝てそうにないと思った。

でも、やっぱり綾ちゃんはズルいよ。

「綾ちゃんのストーカー！」

「何おうっ?!」

余計好きになっちゃうじゃないか。

アイスクリーム（前書き）

アイスクリーム

「ありがとうございます」

にっこり笑顔の店員さんに見送られながらあたしと綾ちゃんはコンビニをあとにする。綾ちゃんの大きな手にはたくさんのお菓子とあたしの大好きなオレンジジュースが所狭しと詰め込まれていて重そうだけど、そんなことはおくびにも見せない。いつも鼻をすすりながら抱き着いてくる割には男らしいんだなって思った。

「大丈夫、重くない？」

「重いより？誰かさんがハーゲンダッツ2つも買った上にオレンジジュースもちょうっかり2つ買ったから」

「う、ごめん」

まさかちよつとした腹いせに、だなんて言えないしね……。

「まあいいけど。あ、ところでましろ、明後日の土曜日って暇？」

「え？あ、暇だけど」

「ね、二人ででかけない？」

首を傾げて伺う綾ちゃん。

そんな可愛いことされて断れる人っているの？いや、いないでしょ！！

「い、いいよ」

「よかった。孝仁には内緒ね？」

なんでお兄ちゃんに内緒？

まあ綾ちゃんとお出かけできるならなんでもいいか！

「賄賂は駅前のジャンボパフェね」

「はいはい。全くよく食べる子なんだから」

ポンポンと頭を撫でる綾ちゃんにあたしはほっぺたを膨らませた。
あそこのパフェすごく美味しいんだから！生クリームとチョコレー
トのしみ込んだスポンジ、それにお店自慢のアイスとの相性は計り
知れないくらい良いんだよ！？全く綾ちゃんはわかってないんだか
らっ。

「綾ちゃん、そのパフェ食べたことないでしょ」

「まあ、あんまり食べないね」

「明後日はきつとそのパフェの虜になるよ！」

「え〜……」

「えーじゃないの！あたしが美味しさを教えてあげるからっ」

「はいはい、ましろは甘いのが好きだからね？」

もっ！！

綾ちゃんてばバカにしてっ！！

「ただいまあ」

「あらお帰りなさい。綾稀君もお疲れ様？」

「そんなことないですよ。俺もお菓子食べたかったし」

にっこり笑えばお母さんがうっとりしたように微笑んだ。

「綾稀君、ましろちゃんのお婿さんにならない？」

「はあ！？」

お母さんなおっ!!!!???

「ああ、それもいいですね。ましろ俺の嫁になる??」

またしてもぴったりとくっついてあたしの肩を抱き、意地悪な笑みを浮かべて問う綾ちゃんを軽くどついて、あたしは赤くなりながらも反対した。

「あたし、駅前のパフェの良さがわかる人と結婚する!」

「パフェ?」

「ただだけあそこのパフェ好きなんだよ……」

きよとんとした顔のお母さんに、呆れた顔しながらやってきたお兄ちゃん。

お兄ちゃんとも一度パフェ食べに行ったけど良さはわかってもらえなかったんだよなあ……。

「だって美味しいんだもん。あそこのパフェ……」

綾ちゃんにはあの美味しさわかってもらいたいなあ。やっぱり好きな人にはわかってもらいたいって、押し付けがましいかな……?

「そんなましろって可愛いよ。女の子っぽくてさ」

ね?っってお兄ちゃんに同意を求めれば、お兄ちゃんも苦笑しつつそうだなって言った。別に無理して同意しなくてもいいのにつ。お兄ちゃんに言われたって嬉しくないし!……でも綾ちゃんに言われるのは嬉しい、な。でも綾ちゃんは男の子好きだから女の子っぽいって言われても褒められてる気がしないいいい。

「ほらましろ、早く部屋は入れ。みんなでゲームするぞ」

「え？ゲーム？」

「綾がWi〇持ってきたからやるぞ」

お兄ちゃんの手にはマ〇オカートやらリズ〇天国やらが握られていてそりゃあもう楽しそう。うん、いますぐやりたい！！！！

お母さんの後を追いかけてそそくさと部屋に入ろうと思ったけど、先に綾ちゃんにお礼を言おうと振り返れば、お兄ちゃんが綾ちゃんから軽々と荷物をさりげなく受け取ってそのまま台所の方へと向かっていった。そんな兄ちゃんをなんだか嬉しそうに眺める綾ちゃんがいって胸がズキズキと痛む。

その表情はいつもあたしに見せてくれる優しい眼差しと違って愛おしさが溢れんばかりに出てる。

嗚呼、やっぱり綾ちゃんの心はお兄ちゃんに向いていて、ちっともあたしなんか見てくれてない。

ズキズキと痛む心は増すばかり。

本当にあたしのお嬢さんになってくれればいいのに。

あたしは綾ちゃんのお嫁さんになりたいよ……。

（心が、痛い……）

あたしは綾ちゃんから目を離し、一人部屋の中に戻った。

テーブルに置いていたアイスは溶けかけていて、ほんのりと甘いにおいが鼻をくすぐる。

一口食べたアイスクリームはやっぱり甘くて、でも不思議となんだ

かしよっぱい気がした。

お兄ちゃん

お風呂上がりに立ち寄った台所で、偶然居合わせたお兄ちゃんが美味しいオレンジジュースを作ってくれた（生のオレンジジュースを絞ってイチゴのジャムをほんの一匙入れた特性ジュース）。渴いたのどに新鮮なオレンジジュースがとっても美味しくて、つつい飲みすぎちゃうんだよね。

あたしは火照った体を覚ますようにオレンジジュースを飲みながら、ちらりとお兄ちゃんを覗き見る。

お兄ちゃんは綾ちゃんとは別の種類の美形らしい。前に友達が二人を見たときに興奮気味に語ってたっけ。確かにお兄ちゃんは妹のあたしから見てもかっこいいと思う。短めの黒髪に釣り目で切れ長の黒い瞳、病的ではないけど割と肌は白いし、身長はあやちゃんよりも少し大きい。体のつくりは意外とがっちりしてるし……。線の細い綾ちゃんとは対照的だと思う。綾ちゃんはモデルのような引き締まり方だし、お兄ちゃんはどちらかと言えばアスリートみたい。手足は長いけど逞しいし手だつてごつごつしてる。何から何まで正反對。だから綾ちゃんはお兄ちゃんが好きなのかな……？

じいっとお兄ちゃんを見すぎたせいかな、お兄ちゃんが困ったような顔で振り返った。

「あのな、見すぎ。穴あくっつーの」

「あ、ごめん。何してるのかなって」

「ああ、これ？今クッキー作ってんの」

「綾ちゃんにあげるの？」

「はあ?? 綾にあげてどーすんだよ」

あいつ男だろ、ってお兄ちゃんがぼやいた。まあ、普通はそうなのかもしれないけど……綾ちゃんの気持ち知ってる身としては何と言っ
っていいやら……。

「……彼女にあげんの」

「へえ、彼女ねえ」

……………ん?

「か、彼女!？」

思わず身を乗り出してしまった。

お兄ちゃんもびっくりしたようにうおって言ってクッキーの生地を落としそうになった。そのまま落としちゃえばいいのにつ。や、でも、お兄ちゃんに彼女ができた方が都合が……って、あたし嫌な子じゃなか!!!と、とにかく……

「お兄ちゃんいつの間に!？」

「あのなあ、俺だって健全なオトコノコなの。わかる？」

呆れるお兄ちゃんに、確かに、とちよつと納得。そうだね、いつも綾ちゃんと遊んでるから女っ気ないと思ってたけど……最早いたとは。とりあえずにつこり笑っておめでとうって言えば、お兄ちゃん
はなんか微妙な顔して（なんか寂しげ?）ありがとうだって。妹に知られたくなかったのかな? 恥ずかしいとか?

「で、どんなこ? 名前は? 可愛いんでしょ?？」

「っ、だ、誰だっていいだろ！ほらとつとと寝ろっ」

しっしって犬を追い払うように手をやるお兄ちゃんに頬を膨らませつつ、あたしは可愛い愛犬のモコ（シュナウザー♀）を抱っこして部屋に戻った。何さ何さ、照れちゃって。ああ、でも明日綾ちゃんと遊ぶのになんか顔合わせづらいや……。

（どうしよう……。 ）

あたしは扉に寄りかかりながらずると滑るように床に座った。言うべきか、否か。

結局待ち合わせの場所に来るまで決まらなかった。家にいて服を考える時も、髪をセットするときも、何をするときもぐーるぐるって感じだったけど。いっそのこと綾ちゃんには言わない方がいいのかもしれない。でも知ってしまった以上言った方がいいのかもしれない。あの時あの場所にいなければ、なんてもう後の祭りだから。

「あー……、困った……」

「何が困ったの？」

ガバツと勢いよく抱き着いてきたことにびっくりて思わず奇声をあ

げそうになったのを必死でこらえる。だって綾ちゃんが耳元で「しーっ!」って慌てたように言うんだもん。

「び、びっくりした」

「そりゃこっちのセリフ! 殺す気なの!？」

「い、いや、ハハ……」

もう……とつぶやく綾ちゃんに苦笑すれば、綾ちゃんは行くよ? っ
て行って歩き出した。詮索されずにすんでほっと胸を撫で下ろして、
あたしは綾ちゃんの後を慌てて追いかけた。

「今日はどこ行くの？」

「さてどこでしょう。ヒントはましろの好きそうなところ」

にっこり悪戯っ子な笑みを浮かべて笑う綾ちゃんに思わずドキリ。
なんか今更にながらにこれってデートなんじゃ……っていう気がして
きた。ってゆーかデートじゃん!! 綾ちゃんと二人きり! 歩いてる
! 所、それに綾ちゃん、ちゃんとお洒落してきてくれるし……っ。
最近ちよっと寒くなってきたから厚手で長めのカーディガン羽織っ
て、中はシンプルにロンティーで、ジーンズはスキニータイプだけ
ど綾ちゃん足細いし、長いからすごく似合う……。マフラーのガラ
だって絶妙にマッチしてるし……。

(カッコいい……)

「あ、あたしの好きなところ……?」

「そっ。ましろの好きなところ。って言ってもパフェじゃないよ?」

「わ、わかってるよっ」

あたしの好きなもの好きなもの……。あ、この方角ってまさか?

「ほら、答えないから着いちゃった」

そう言って綾ちゃんが指差したのは可愛いテディベアがたくさん並ぶ、最近できたばかりのベアハウス。ずっと行きたいと思ってたところだからすっつごく嬉しいっ!!

「あ、綾ちゃんっ!!」

「ん？」

「ありがとう!! 嬉しいっ!!」

ぎゅうって抱き着いて綾ちゃんにお礼を言えば、綾ちゃんはちよつとびっくりしたような表情をしたけどすぐに笑って撫でてくれた。いつもは赤面しちゃうけど、今日はにやけちゃう。やっぱり、デートみたいで嬉しいっ。

あたしは綾ちゃんの手を引きながらお店の中に入った。
そこからはもう幸せの時間でした（個人的に、ね）。

「くまちゃん買っちゃったーっ!!」

ぎゅうっと小さめのピンクのくまちゃんを抱きしめると（これでも5000円はしたよっ）、綾ちゃんがすごく優しい目で見てた。
あたしたちは今ベアハウスの裏の甘味屋さんに来ていて例のパフェ

を注文中。まさか裏だったとは（方向音痴）……。

「ああ、幸せ。でもあの青い大きなくまちゃんも欲しかったなあ……」

青いくまちゃんは1万円もするから諦めたの。泣く泣くね、本当は欲しかったけど……。

「あ、そう言えば綾ちゃんは何買ったの？ベアハウスと中で繋がってるお隣のお店に行ってたんでしょ？？」

なんかシルバーアクセのたくさん売ってるお店に。あたしがくまちゃん見てる時に綾ちゃんがちょっと行ってくると5分ほどいなくなっただから。

「さあね。内緒」

ちょっと嬉しそうに、それに楽しそうに笑う綾ちゃんになぜだかそれ以上聞くのは駄目だと思った。きつと聞いたら傷付くってどこかで思ったからなのかも。そう思ったらなんだかどろどろとした黒い嫌なものが胸の中を渦巻いて苦しい……。こんな気持ちになりたくないのに、なのにあたしの胸を這いずり回って……。

「おまたせしました」

その黒いどろどろは大好きなパフェを食べてても消えることはなかった。

ズルい気持ち

綾ちゃんとデートした日からあたしはどこか可笑しくなってしまったらしい。

綾ちゃんの顔を見たり、考えたりするだけでもやややして、心苦しくて……。もうこれが限界なんだって思った。ずっと綾ちゃんのことが好きで、ただそばにいられるだけでもいいって思ってた頃とは違って今はよくばりになったと思う。そばにいたら触れたい、愛されたいって。あたしだけを見てほしいって言っちゃいそうになる。

メールも、電話も、出られないままで、触ろうとする手が拒否して動けない。綾ちゃんだけの特別な着信音を聞くだけで胸が張り裂けそうで、泣きたくなる。どこかで思ってたのかもしれない。ずっとそばにいて綾ちゃんを慰めて、お兄ちゃんが無理だと諦めがついたときに、あたしを必要としてくれるんじゃないかって。そんなちゃんのことを夢見てた。でも待てど暮らせど綾ちゃんの心はお兄ちゃんのモノ。あたしはもうすぐ卒業を迎えてしまう。一応進学先は綾ちゃんたちと同じ大学だけど、それも今となっては迷いどころ……。

「はあ……」

冷たくなった手をこすり合わせれば、じんわりと熱が宿る。

制服の上に羽織ったPコートのポケットに入ってる携帯が静かになった。聞きたくない、着信音。耳に響いて離れない、でも出る気にはならない。手持無沙汰になった手をどうしようかと考えていると、ふいに後ろから腕を引かれた。

「ましろ……っ、」

あ、やちゃ……ん。

目を見張るほど驚いた。だって今の今まで考えてた綾ちゃんが今ここにいるんだもん。

泣きそうな顔をしてあたしを抱き寄せる綾ちゃんに、あたしは言葉もでなかった。なんでこんなことになってるんだろって、精一杯考えたけどさっぱりわからなくて。抱きしめ返せるほどの余裕もなく、困った声で綾ちゃんの名前を呼ぶしかできなかった。

「綾ちゃん……」

「ましろ……っ」

「んっ!？」

綾ちゃんの、冷たい唇が重なった。

頭の中は真っ白で、何も考えられなかった。ただ触れるだけだった唇から、ぬるりとした舌の感触がして逃げようとすれば、綾ちゃんはそれを許すことなく、さらにあたしをきつく抱きしめて口内を犯す。気が狂いそうだと、思った。

「どこにも行くな……」

苦しそうにつぶやいた綾ちゃんはいつもみたいにお姉チックな言葉づかいじゃなくて、お兄ちゃんといるときみたいな口調だった。その時、なんとなくだけ綾ちゃんがお兄ちゃんの彼女の存在を知ってしまったんじゃないかなって、そう思った。それ以外に綾ちゃんがこんな風になることなんてないじゃない……。

胸がズキズキと痛む。でもそれより先に体が動いてた。崩れそうな綾ちゃんの体を抱きしめて、あたしが、と気が付いたら口を動かしてた。

「あたしがずっとそばにいてあげるからっ。お兄ちゃんの変わりでいいから……綾ちゃん、あたしがそばにいてあげる……」

だから、そんな顔しないで……っ。

「……ほ……トに？」

ぽつりと綾ちゃんがつぶやいた。
ぎゅうってきつく抱きしめて、綾ちゃんが耳元で囁く。

「ホントに？ ましろは、そばにいてくれる……？」

「うん、そばにいる……」

わかった、と綾ちゃんが小さくつぶやいた。
相変わらず抱きしめる力は痛いほどだし、顔を首筋に埋めたまま動かないけど、それでもあたしは満たされてた。綾ちゃんが傷付いてるのに。でも心のどこかで本当は泣いていたのかもしれない。罪悪感とか、一時でも満たされた心に対して。

あたしは、ズルい……。

綾ちゃんはあたしからゆっくり離れると、いつも優しく頭を撫でくれた手であたしの手を握った。小さいね、ってちよっぴり笑いな
がら。そしてゆっくり、あたしの手を引いて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8891z/>

Parasitic on Love.

2011年12月29日22時48分発行